SPMシミュレータの現状と課題

東北大学AIMR 塚田 捷 20017.12.9v



参考:SPMシミュレータガイドブック

刊行書:共立実験物理学シリーズ 2009年刊行

走査プローブ顕微鏡 第5章 SPMの理論シミュレーションとその応用 総説:走査プローブ顕微鏡による表面・界面の理論研究 表面科学 31(2010) 66

SPM Simulator developed with AA&S Advanced Algorithm & Systems

www.aasri.jp/pub/spm/pdf/catalog/spm_case_examples.pdf



FM-AFM image simulation of tubulin and DNA by GeoAFM



ncAFM study of muscovite mica in aqueous solution



K. Kobayashi, et al, J.C,P 138, 184704 (2013)

STM image of SrTiO₃(001) √13 × √13−R33.7°



KPFM image of Si(001)-c(4x2)

-image of local contact potential differnceeffect of embedded imturity atoms



A.Masago et al, Phys. Rev. B 82 (2010)195433

SPMシミュレータソルバーと機能 2017.12v



シミュレータ開発の当面の課題

★ [1] μmオーダーのKPFM観察解析から、誘電率、分極など試料・探針の電気特性決定へ

★[2]探針・試料上の付着水分子の影響

- ★[3]実験結果から、物性値を決める方法の開発。逆問題はユーザーのニーズに適合 試料の物理量の絶対値を算出。計測データを解釈できるようにする。
- ★[4]粘弾性を考慮したAFM tappingモードのシミュレーション 大気中のソフトマタ—計測へ 試料表面に薄い水被膜が有る系など、接触・分離系にも対応
- ★[5]溶液中の帯電試料、DLVO理論による電気二重層の斥力を考慮した AFMシミュレーション,溶液中のソフトマタ—計測へ
- ★[6]たんぱく質などの動的な振る舞い。高速AFMシミュレーションの開発。

[7] 探針のより大きな領域までの形状を取り入れる。

[8] 微粒子の計測データについて、探針効果のデコンボリューション







一致度の極大のための最適化新規モデル推定法

探針の面内位置 探針の高さ 観測データ Δf (**r**, h): 周波数シフト Φ(**r**, h): 位相シフト **推定物理量** G(**r**):ばね弾性率 η(**r**): ダッシュポット粘性率 H(**r**):表面高さ

....その他 以下では r を一つに決めた場合に特定するので、r は書かない。

観測データ理論値 $\Delta f_c(G,\eta,H,...,h)$: 周波数シフト $\Phi_c(G,\eta,H,...,h)$: 位相シフト

不一致度 $Y(G,\eta,H,...) = \sum_{i=1}^{N} \left\{ \left(\Delta f(h_i) - \Delta f_C(G,\eta,H,...,h_i) \right)^2 + \left(\Delta \Phi(h_i) - \Delta \Phi_C(G,\eta,H,...,h_i) \right)^2 \right\}$

不一致度を最小にするように、推定物理量(の確率分布)を決める。







変形を取り入れる

電気化学SPMにおける距離の計測

目的:バイオ系・高分子系・電気化学系のAFM計測に対応するシミュレータ開発 基礎となる現有シミュレータ: GeoAFM, FemAFM, LiqAFM(接触問題) +新たな付加機能 計測対象:高分子系、粘弾性系、生体ナノ構造(細胞、たんぱく質等)、電気化学系、接触系

特徴: 液中特に電界液中における探針試料間力をDLVO力などで扱い、試料の変形を 含めたAFMシミュレーションを効率よく・迅速に行う。試料の表面電荷・電気二重層の 効果を含め、バイオ系や電気化学系に対応する。必要に応じGeoAFMで簡単な試行 像を得て、変形まで含めた詳細計算に移る。メニスカス形成距離を接触問題で扱い、 電気化学SPM用のシミュレーションを行う。散逸量を計算して、バイオ系や粘弾性系 ・接触系のAFM法を提案し、そのシミュレータを開発する。

開発方針:各分野の実験家(中嶋先生、末永先生、他、分担者候補でもある)のご意見を聞き つつ、どのようなシミュレーションを行うかの課題設定を行う。具体的なシミュレー ション理論の研究と新たなソフト開発の検討を行う。国プロとして魅力的なストーリー を作る。

何をどうシミュレートするか



FemAFM



2015.3.28 作成 2017.12.9 改訂

GeoAFMでは力を計算しないので真 空中、大気中、(電解)液中のいずれ にも対応している。

ほぼできている。

FemAFMでは、原子レベルではないが 試料変形を取り入れることができる。 また適当な力のモデルを採用して、真空中、 大気中、(電解)液中の環境下の計測を シミュレーションできる。 DLVO法により電界液中AFMにも対応できる。

接触問題を含め探針の動力学をとく。 試料の粘弾性変形を含める。 粘弾性接触問題系AFMシミュレーションの 方法論は開発済。ソルバー拡張する。 高速AFMへの対応へと拡張する。

マクロKPFM像の計算ソルバーを境界要素法で 作成する。これを基礎にしてマクロKPFMシミュレー タのソルバーを作成する。 境界要素法計算法をコーデイングすることから。

DLVO理論による液中AFMシミュレータ

塚田捷 WPI-AIMR 東北大学 2017.7.8



1. 電気2重層による斥力

2. Van der Waals引力



試料表面

DLVO理論による電気2重層の斥力は 次ページ以降の従来法と、境界要素法による 計算が可能である。両方について述べる。

この二つにより、探針に働く力を決める。



Van der Waals引力: $V_A(x) = -\frac{aA}{12x}$ 全相互作用ポテンシャル: $V = V_T + V_A$



探針と表面との相互作用: van der Waals 引力項

原子間相互作用
$$v_{vdW} = -\frac{C_{vdW}}{r^6}$$
 原子間距離=

探針·表面間相互作用: $V_{TS}^{vdW}(z) = \iint_{TS} v_{vdW}(r) \rho_T dr_T \rho_S dr_S$ $= -\frac{A_H}{6\pi} \int_0^H \frac{S(h)}{(z+h)^3} dh$ 相互作用力: $F_0^{vdW}(z) = -\frac{dV_{TS}^{vdW}}{dt}$



相互作用力:
$$F_{TS}^{vdW}(z) = -\frac{dV_{TS}}{dz}$$

Pyramidal or conical

$$F_{TS}^{\nu dW}(z) = -\frac{A_H \chi}{6\pi} \left(\frac{1}{z} - \frac{1}{z+H} - \frac{H}{(z+H)^2} - \frac{H^2}{(z+H)^3} \right)$$

$$\chi = 4 \tan^2 (\alpha/2) \quad \chi = \pi \tan^2 (\alpha/2)$$

parabolic

$$F_{TS}^{vdW}(z) = -\frac{A_H R}{6} \left(\frac{1}{z^2} - \frac{1}{(z+H)^2} - \frac{2H}{(z+H)^3} \right)$$

spherical
$$H = 2R$$

 $F_{TS}^{vdW}(z) = -\frac{A_H R}{6} \left(\frac{1}{z^2} + \frac{1}{(z+H)^2} - \frac{2}{H} \left(\frac{1}{z} - \frac{1}{Z+H} \right) \right)$



 ψ :溶液中のポテンシャル

$$\Delta \psi = \kappa^2 \psi \qquad \kappa = \sqrt{\frac{e^2 \sum z_i^2 n_{i\infty}}{\varepsilon kT}}$$



表面電荷密度: σ 法線微分 $\varepsilon \frac{\partial \psi}{\partial n_i} = \sigma_i$

この条件のもとで *Ψ* を解いたとして この配置でのエネルギーは

$$V(\{R_i\}) = \sum_{i} \prod \sigma_i \tilde{\psi}_i dS_i$$

 $\tilde{\psi}_i$ *i*を除く物体による電位分布

(i=1) (i=2) (i=3)

これを物体iの配置について微分すれば、iに働く力が求められる。

ヘルムホルツ方程式の解に対するグリーンの定理

グリーンの定理とは、 任意の調和関数に対して $\varphi(\mathbf{y}) = \frac{1}{4\pi} \prod_{s} \left(\frac{1}{r} \frac{\partial \varphi}{\partial n} - \varphi \frac{\partial}{\partial n} \left(\frac{1}{r} \right) \right) dS$



ヘルムホルツ方程式の解への拡張 $\Delta \varphi = \kappa^2 \varphi$

$$\varphi(\mathbf{y}) = \frac{1}{4\pi} \iint_{S} \left(\frac{e^{-\kappa r}}{r} \frac{\partial \varphi}{\partial n} - \varphi \frac{\partial}{\partial n} \left(\frac{e^{-\kappa r}}{r} \right) \right) dS = \frac{1}{4\pi} \iint_{S} \left(\frac{e^{-\kappa r}}{\varepsilon r} \sigma_{S}(\mathbf{x}) - V_{S}(\mathbf{x}) \frac{\partial}{\partial n} \left(\frac{e^{-\kappa r}}{r} \right) \right) dS$$

ヘルムホルツ方程式の解は境界での電位と電荷によって決まる。



探針Aが平板表面Bから受ける力のポテンシャルの計算法

$$V_{tip} = \prod_{S_A} \varphi_{S_A} \sigma_{S_A} dS_A = \left(\frac{2\sigma_{S_B} + \mathcal{E}\mathcal{K}V_{S_B}}{4\mathcal{E}\mathcal{K}}\right) \prod_{S_A} \sigma_{S_A} (\mathbf{x}) e^{-\mathcal{K}h(\mathbf{x})} dS_A \cong \left(\frac{3\sigma_{S_B}}{4\mathcal{E}\mathcal{K}}\right) \prod_{S_A} \sigma_{S_A} (\mathbf{x}) e^{-\mathcal{K}h(\mathbf{x})} dS_A$$

$$\sigma_{S_B}, V_{S_B}$$
は定数扱いとする場合で
 $\varphi_{S_A}(\mathbf{x}) = \frac{1}{4\pi} \iint_{S_B} \left(\frac{e^{-\kappa r}}{\varepsilon r} \sigma_{S_B}(\mathbf{y}) - V_{S_B}(\mathbf{y}) \frac{\partial}{\partial n_{S_B}} \left(\frac{e^{-\kappa r}}{r} \right) \right) dS_B$ を代入し計算した。

Rを探針の曲率半径とすると 探針上の電荷密度を定数と仮定して、

$$V_{tip} = \left(\frac{2\sigma_{S_B} + \varepsilon \kappa V_{S_B}}{4\varepsilon \kappa}\right) \sigma_{S_A} \prod_{S_A} e^{-\kappa h(\mathbf{x})} dS_A$$
$$= \left(\frac{2\sigma_{S_B} + \varepsilon \kappa V_{S_B}}{4\varepsilon \kappa}\right) \sigma_{S_A} e^{-\kappa H} \int_{0}^{\infty} e^{-\kappa X^2/R} 2\pi X dX$$
$$= \frac{\pi R}{\kappa} \left(\frac{2\sigma_{S_B} + \varepsilon \kappa V_{S_B}}{4\varepsilon \kappa}\right) \sigma_{S_A} e^{-\kappa H} \cong \frac{\pi R}{\kappa} \left(\frac{3\sigma_{S_B}}{4\varepsilon \kappa}\right) \sigma_{S_A} e^{-\kappa H}$$



 $\sigma_{S_B} = \tilde{\sigma}_{S_B}(\mathbf{y}), V_{S_B} = \tilde{V}_{S_B}(\mathbf{y})$ とすれば、表面のDLVO像 も見られる。(幾何学的高さHの像の他に)

DLVO力 簡易拡張版 試料の電位を外部から与える場合

Rを探針の曲率半径とすると [前回の説明]

吾妻さんの使った式

$$F = \frac{2\sigma^2}{\varepsilon\varepsilon_0} e^{-\kappa D} \quad (式1 \quad 平行平板)$$

$$F = \frac{2\pi R \sigma^2}{\kappa\varepsilon\varepsilon_0} e^{-\kappa D} \quad (式2 \quad 球体間)$$

付加電荷 = $\Delta \sigma$

$$F = \frac{3\sigma_{S_B}\pi R}{\kappa\varepsilon\varepsilon_0}\sigma_{S_A}e^{-\kappa D}$$
$$= \frac{2\pi R\left(\Delta\sigma + 3\sigma_{S_B}/2\right)}{\kappa\varepsilon\varepsilon_0}\sigma_{S_A}e^{-\kappa D}$$

とすればよいか??



DLVO理論によるAFM画像

吾妻さんの計算結果



第一原理計算による水分子の吸着構造

直方体の試料:縦・横10.0[Å]、高さ0.4[Å] 球形の探針:直径2.0[Å] 高さー定モード 探針と試料の最短距離:3.6[Å] 法には、100%
 法には、100%
 法には、100%
 法には、100%
 法には、100%
 法には、100%
 法には、100%
 スロ電位には、100%
 スロ電位には、100%
 スロ電位には、100%
 スロ電位には、100%
 スロ電がの100%
 スロ電波の極子を置く







DLVO電気2重層斥力および 巨視系KPFMのための境界要素法

絶縁体上の電荷分布を求めるシミュレーションについて

大手コピー機メーカーへのヒアリング調査での要望



マクロ系におけるKPFMの応用領域 [1]半導体デバイス・分子デバイス 作 [2]たんぱく質分子・DNA・細胞 非常にたくさんの応用領域がある。

作動条件下での電位分布

絶縁体試料と金属探針間の KPFMカとDLVOカの計算

有限要素法の適用



探針に働く静電気力またはDLVO力を、 バイアス電圧 V、探針のスキャン位置、 高さの関数として求めること

境界要素法の応用



・
ポテンシャル
$$\phi(\mathbf{x})$$
 の条件
 $(\Delta - \kappa^2)\phi = -f$ for $\mathbf{x} \in \Omega$
 $\phi = V$ for $\mathbf{x} \rightarrow S_A$
 $\varepsilon \frac{\partial}{\partial n}\phi = \sigma$ for $\mathbf{x} \rightarrow S_B$

モデル1の場合

- 1) 導体A(探針),絶縁体B(試料)の外側領域 Ω で、与えられた電荷分布 $\sigma(S_B)$ とバイアス Vについて、ポテンシャル $\phi(\mathbf{x})$ を計算すること Ω 内に電荷 $f(\mathbf{x})$ があっても良い。
- 2) 導体A(探針)の受ける力

$$\mathbf{F} = \frac{1}{8\pi} \iint_{S_A} \left(\frac{\partial \phi}{\partial n} \right)^2 \mathbf{n} dS$$

を計算すること

3) *κ* = 0 大気中、または真空中
 κ ≠ 0 溶液中
 両方の環境に対応する。

境界値問題の基本式





$$\mathbf{x}_{0} \in V \mathcal{O}$$

$$\begin{cases} \varphi_{2}(\mathbf{x}_{0}) \\ \frac{\omega(\mathbf{x}_{0})}{4\pi} \varphi_{2}(\mathbf{x}_{0}) \end{cases} = \iint_{s} \left(\frac{\exp(-i\kappa |\mathbf{x} - \mathbf{x}_{0}|) 1}{4\pi |\mathbf{x} - \mathbf{x}_{0}|} \frac{\partial \varphi_{2}(\mathbf{x})}{\partial n} - \frac{\varphi_{2}(\mathbf{x})}{4\pi} \frac{\partial}{\partial n} \frac{\exp(-i\kappa |\mathbf{x} - \mathbf{x}_{0}|)}{|\mathbf{x} - \mathbf{x}_{0}|} \right) dS$$

 $\mathbf{X}_0 \in S$ の場合 $\omega(\mathbf{x}_0)$ は、 \mathbf{X}_0 からみた曲面Sの頂角(立体角) 特異点以外は 2π

 φ_2 の領域内部の値は境界でのその値と勾配の値で完全に決まる。



 $(\mathbf{x}_{0}^{\bullet})$ S_{ε} 無限系グリーン関数 $U(\mathbf{x}-\mathbf{y})$ を用いた境界要素法アルゴリズム導出

$$U(\mathbf{x} - \mathbf{y}) = \frac{\exp(-\kappa r)}{4\pi r} \qquad r = |\mathbf{x} - \mathbf{y}| \qquad \Longrightarrow \qquad (\Delta - \kappa^2)U(\mathbf{x} - \mathbf{y}) = -\delta(\mathbf{x} - \mathbf{y})$$

求めるべきポテンシャル
$$\phi(\mathbf{x})$$
の境界条件
任意の界面上の点 $\mathbf{y} \in S = S_A \cup S_B$ について
 $\lim_{x \to \mathbf{y}} \phi(\mathbf{x}) = u(\mathbf{y}) \lim_{x \to \mathbf{y}} \frac{\partial \phi(\mathbf{x})}{\partial n} = q(\mathbf{y})$
 $u(\mathbf{y}), q(\mathbf{y})$ は表面で与えられる量
 $\phi(\mathbf{x}) = \iiint_{\Omega} U(\mathbf{x}-\mathbf{y})f(\mathbf{y})d\mathbf{y} + \iint_{S} U(\mathbf{x}-\mathbf{y})q(\mathbf{y})d\mathbf{y} - \iint_{S} \frac{\partial U(\mathbf{x}-\mathbf{y})}{\partial n_{\mathbf{y}}}u(\mathbf{y})d\mathbf{y}$
この式で \mathbf{x} を境界上の点 \mathbf{Y} に近づけると $\lim_{x \to \mathbf{Y} \in S} \phi(\mathbf{x}) = u(\mathbf{Y})$
境界の特異点 でなければ $\omega = 2\pi$
当面の問題では $u(\mathbf{Y}) = \begin{cases} V \quad \mathbf{Y} \in S_A \\ 0 \quad \mathbf{Y} \in S_B \end{cases}$
 $\phi(\mathbf{x}) = \lim_{S \to \mathbf{Y} \in S_A} \int_{S} q^2(\mathbf{y}) \mathbf{n} d\mathbf{y}$

境界上のメッシュにおける有限要素法計算 真空を囲む二つの導体間の問題

$$\frac{\omega(\mathbf{Y})}{4\pi}u(\mathbf{Y}) = \iiint_{\Omega} U(\mathbf{Y} - \mathbf{y})f(\mathbf{y})d\mathbf{y} + \iint_{S} U(\mathbf{Y} - \mathbf{y})q(\mathbf{y})d\mathbf{y} - \iint_{S} \frac{\partial U(\mathbf{Y} - \mathbf{y})}{\partial n_{\mathbf{y}}}u(\mathbf{y})d\mathbf{y}$$

$$\frac{\omega(\mathbf{Y}_{m})}{4\pi}u(\mathbf{Y}_{m}) = \iiint_{\Omega} U(\mathbf{Y}_{m} - \mathbf{y})f(\mathbf{y})d\mathbf{y} + \sum_{n} \iint_{S_{n}} U(\mathbf{Y}_{m} - \mathbf{y})q(\mathbf{y})d\mathbf{y}$$
$$-\sum_{n} \iint_{S_{n}} \frac{\partial U(\mathbf{Y}_{m} - \mathbf{y})}{\partial n_{\mathbf{y}}}u(\mathbf{y})d\mathbf{y} \qquad \text{first} U(\mathbf{x} - \mathbf{y}) = \frac{\exp(-\kappa|\mathbf{x} - \mathbf{y}|)}{4\pi|\mathbf{x} - \mathbf{y}|}$$

 $q_m = q(\mathbf{Y}_m) \leftarrow 未知$ $u_m = u(\mathbf{Y}_m) \leftarrow$ 既知 電界液中の金属探針と金属試料間の力を計算する場合

 $q_m = q(\mathbf{Y}_m) \leq \pi m$ 未知(探針上)既知(試料上) 電界液中の金属探針と電荷密度を与えられた $u_m = u(\mathbf{Y}_m) \leftarrow mm(探針L)、未知(探針L) 絶縁体試料間の力を計算する場合$

タッピングモードAFMのシミュレーション法開発

適用範囲



主な開発課題 既に進捗している部分もあるがより現実対応を目指す

- 1) 粘弾性試料へ展開して、逆問題法により物性パラメータを決定する。
- 2)液中高速AFM計測に対応する。(特に、バイオ系)
- 3)凝着と分離のヒステリシスや、試料の水皮膜の影響を取り入れる。
- 4) 電解液による電気2重層効果を取り入れる(DLVO理論)
- 5)マクロ系のKPFM像の計算を可能とする。

単振子(または弾性体カンチレバー) モデルによるAFM像計算法 (共鳴振動数と位相シフトの求め方)

方法 1 標準理論による解析的な方法

カンチレバー運動方程式を単振子運動に射影 単振子のための解析的理論

方法 2 カンチレバー運動方程式または単振子 運動方程式の数値積分法

$$\rho S(z) \frac{\partial^2}{\partial t^2} h(z) = -\frac{\partial^2}{\partial z^2} EI(z) \frac{\partial^2}{\partial z^2} h(z) - \eta(z) \frac{\partial}{\partial t} h(z) + F^{\text{liq}}(z) - \frac{\partial}{\partial z} V_{TS}$$

$$\longrightarrow EI \frac{\partial^4 x(\xi,t)}{\partial \xi^4} + \gamma \frac{\partial x(\xi,t)}{\partial t} + \rho \frac{\partial^2 x(\xi,t)}{\partial t^2} = \tilde{F}_{\text{liq}}(\xi,t) + \tilde{F}_{TS}(\xi,t)$$

$$\ddot{x}(t) + \gamma \dot{x}(t) + (2\pi f_0)^2 (x(t) - L) = \cos(2\pi ft) + F(x(t))$$

液中弾性体の全運動として計算



・ 一つのノーマルモードに射影して計算

AFMにおける単振子モデル標準理論 -方法 1-



粘弾性系と接触(凝着・濡れ)系のモデリング



接触問題のJKR理論と 接触問題を含む系の タッピングモードAFM

接触問題のJKR理論 -ヒステリシスのある系-







接触系におけるヒステリシス部分と粘弾性部分の扱い方



ソフトマテリアルの粘弾性的性質-方法2計算例-



液中粘弾性試料高速AFMシミュレータ

LiqAFM 液中ソフトマテリアル AFMシミュレータ

方法2による

シミュレーションの方法として、まず走査や粘弾性の パラメータを設定した後、カンチレバーの振動とスキャン 動作を同時に実行させる。振動周期とスキャン速度が 同程度になってもよいことにする。これは高速AFMの シミュレーションに相当する。 探針高さの包絡線として、高速AFMイ メージをシミュレーションする。また、励 振振動との位相差からもイメージをシ ミュレーションできる。これらによって高 速AFM像をシミュレーションする。



方法1による AFMシミュレーションにおいて も、高さ、スキャン位置における力の計算結 果をコンピュータ内に残しておけば、(1)、(2) 式によって、そのスキャン位置での周波数シ フトやエネルギー散逸、位相のずれを(後処 理で)計算できる:

方法2の応用例 -ステップ列上の高速スキャンと多重モード -



理論と実測のずれ関数

$$f = \sqrt{\left(\frac{\Delta v - \Delta v_{obs}}{\omega_0 / (2\pi)}\right)^2 + \left(\frac{\Phi - \Phi_{obs}}{\pi}\right)^2}$$

 Δv :シミュレーション計算で得た周波数シフト Δv_{obs} :観測値として得られた周波数シフト ω_0 :カンチレバーの共鳴振動周波数 Φ :シミュレーション計算で得た位相シフト Φ_{obs} :観測値として得られた位相シフト



別件 国プロ企画案

第一原理法によるプラズマプローブ用実用探針の解析と設計(仮題) 2017.9.2

小型衛星による電離圏の研究において、DCラングミューア探針を用いるプラズマ計測は重要な役割をはたす。しかし、この計測法において、探針材料の形状・材質と表面上の不純物皮膜層の影響などを考慮したプラズマ診断データの精密解析法は、未だ充分に研究されていない。現状の探針では、計測データがプローブ表面・界面近傍での原子レベルの構造と電子状態、その電場依存性に強く影響されるが、その状況が未解明なためである。

本研究では、プラズマ診断プローブに関わる界面科学の構築を、探針表面の第一原理計算、 SPM法による探針表面計測、理論シミュレーションによる表面・界面状態の解明、局所仕事関 数および界面内電位分布、これらを考慮した電流電圧特性の理論計算などにより実現する。この ような要素研究を総合的に組み合わせてDCラングミューアプローブによるプラズマ診断の精密 計測法の原理を解明し、新規プラズマプローブ法の構築を目指す。

現状のプラズマプローブ法では、ステンレス製のプローブ探針をプラズマに挿入し、その電 流電圧特性を計測してプラズマ診断を行うが、種々の不純物吸着などによる探針表面の原子スケ ールでの汚れや吸着膜が探針の局所仕事関数に予測不能な変化を及ぼし、電流特性に強く影響す る。そこで本研究では、STMやAFMによって探針表面を原子スケールで観察し、SPMシミュレ ータによって表面の原子構造や局所表面電子状態などを解析する。そしてこれによって得られる 表面モデルを基に、局所密度汎関数法などの第一原理計算法に基づいてプローブの表面・界面付 近における電子状態を確定して、その局所仕事関数および界面内の電位分布を決定する。さらに 、これらの知見を基に電圧電流特性を計算する理論を開発し、実用プローブの電流電圧特性を理 論予測し、実験との比較検討を行う。これらを総合してプラズマプローブ診断の詳細な解析法を 構築し、さらに優れた性能を持つ新規探針設計法や新規計測法の提案を行う。

分担課題:

プローブによる電流電圧特性(小山先生、またはご紹介いただく実験家) プローブ表面のSPM計測(小山先生、またはご紹介いただく実験家) SPM計測データの理論シミュレーション (AA&S) 表面界面の第一原理計算と局所仕事関数 (大野先生) 計測法のメカニズムと電流電圧特性理論 (塚田 またはAA&S)